

この課題に対して、私は、ブラジル人の子供達を受け入れる時に、この国の市民としてどのように係るべきかとの観点から、一人でも不就学や不登校を無くすこと、ならびに少しでも学力を高めるための活動をしています。次には、職業をもっとひろく考え選び、組織競争に学歴が不十分な人は、特に自立自営の仕事への準備を始めることが大事であり、「職育」プロジェクトの推進活動をしています。数年間仲間と共に一生懸命していますが、日本社会だけではこれ以上の進展には限界を感じております。昨年、「親の語り場」を開始しました。その時に、皆様の年代が、まず集まり、話し合う場がもっと必要と考えました。皆様のご尽力で、今回の「第二世代語り場」が実現しました。これから、この「語り場」をどのように継続させていくか、皆様でぜひ話し合ってください。そして、次回は常総市か筑西市で開催を企画してみてください。自分達の、第二の時代の始まりの時期ですので話題は尽きないと思います。

熱い討議となった、今の子供達のため、私からの

お願いがあります。

それは、このような集まりを通じて仲間を増やして、周りの子供達に積極的に「勇気を持って、学校の勉強と日本社会のことを人一倍に学ぶことの大切さ」を話し励まして頂きたい。次に親とは、討議で課題としたことを、ご自分の経験も踏まえて話して頂きたいと思います。その内にFBやメールでの発信も使い広く何回も発信を続けて頂きたいと考えます。この方法であれば、余り時間を取らずに出来るのではないのでしょうか。私達は、それが出来る場造りをします。子供がもっと学習できる環境を用意します。親への語り場を、企画しますが、その時にはぜひ一緒に参加をして、ご自分の経験から意見を述べて下さい。

さらには、皆様の年代の課題解決にお役立てることが出来ればと思います。例えば、自立自営を志す方がおられれば、何かのお手伝いできる仕組みを創ります。こんなことを考えながら、当日は帰路に着きました。

本当に有難うございました。

## 真岡市スペイン語教室「AMAUTA」学習支援 活動報告

宇都宮大学国際学部国際文化学科 1 年

遠藤 さくら

7月下旬から、真岡市におけるスペイン語教室「AMAUTA」で、そこに通う子ども達の学習支援を行いました。「AMAUTA」はスペイン語教室ということで、普段は母語維持を目的としてスペイン語を勉強しているところだそうです。今回は、夏休みの宿題の学習支援を行い、HANDSジュニアと一般学生が毎回3～6名くらいずつ活動に参加しました。活動は全部で5回ありましたが、私はそのうち2回参加することができました。

私が担当したのは、小学3年生の男女6人の子供達でした。初めて会ったときは、相手も私も緊張気味で、打ち解けるのに少し時間がかかってしまったように思います。どの子も日本語が堪能で意思疎通に困ることはありませんでしたが、学習となると、漢字の書き取りや読み取り、擬態語、国語に文章読解問題、算数の文章題などを難しく感じているようで、たくさんの質問を受けました。長文問題は、そもそも長い文章を読みたがらない様子で、どこをどう教えたらいいか分からず苦労しました。また、一度に6人分の勉強を見るというのは、ひとりひとりにじっくり時間をかけて

教えてあげることができず、少し残念でした。

最初は警戒するように静かだった子ども、少しずつ打ち解けることができ、後半は好きなことを話したり、新しく覚えた言葉を教えてくれたりしました。些細なことでも、子ども達がいろいろな話をしてくれてとても嬉しかったです。ある女の子は、自分からよく使い込んだスペイン語の辞書を見せてくれました。よく勉強しているなと感心していると、「家でパパと話すときに使うんだよ」と教えてくれました。親の話している言葉を覚えていった自分には、そこまで考えが及ばなかったことを恥ずかしく思うと同時に、スペイン語教室の意味を考えさせられた一瞬でした。

子ども達を見ていると、一生懸命勉強しようとしている子もいれば、仲の良い友達同士でおしゃべりに夢中な子もいました。しかし、どの子もこの場所に来て勉強したり友達に会ったりするのを楽しみにしているように感じました。

私自身は、これまで外国人児童生徒が身近にいたということもなく、大学に入るまで外国人児童生徒の問題を深く考える機会もなく、経験のない自分に何が

できるのか考え、活動に参加するまでは、うまく教えられるか、子ども達と仲良くなれるかなど不安もありました。しかし、実際に子ども達と接して、経験の有無に関わらず、どんなことでも挑戦する姿勢が大切なのだと気

付きました。これからは広い視野を持って、自分にできることは、たとえ微力であっても、子ども達の力になれるように、継続してやっていきたいと思いました。

## シリーズ:学生ボランティア派遣体験記10

### 少しでも力になれば

宇都宮大学国際学部国際社会学科4年

条 川 紘 慧

私は、昨年11月から今年7月まで、週に一度か二度、栃木中央小学校で中央アメリカ出身女児の支援に当たってきました。大学の講義で外国人児童生徒の存在を知り、興味を持ったのがきっかけです。教育現場を知りたいとも思っていました。

昨年、彼女は1年生。月・金曜日は在籍学級にいて、火・水・木曜日は校内の日本語教室に通っていました。私は金曜日に訪れ、在籍学級に早く馴染めるように支援したり、授業中の先生の言葉を分かりやすく説明したりしました。自分の感情や考えを言葉にできないとき、彼女は黙ってしまうこともあり、意志疎通の難しさを実感しました。

2年生になると、在籍学級で毎日過ごすことになり、他の児童と同じペースで、同じ内容を勉強するため、日本語能力が上達してはいるものの、授業の内容をきちんと理解することは正直難しい状態です。どうすれば理解できるのか、支援に行くたびに考えていました。彼女のための支援が本当にできているのかと悩む時もありましたが、訪れると、いつも笑顔で挨拶してくれ、自分の席の近くに私が座るための椅子を用意してくれる姿を見て、この子のために少しでも力になりたいと思いました。

1・2年生と連続してボランティアをしたので、成長や変化、次の段階へ進んだ時に生じる課題などに向き合いながら支援することができました。継続して支援

を行うことで、互いの理解が深まり、よい関係が築けると思いました。

グローバルな現代社会では、様々な国の人々と共生・共存することが求められますが、まさしく教育にも当てはまることだと思います。外国人児童生徒教育の重要性が増す中、日本人児童に対するグローバル教育も今後重視していく必要があると思いました。また、対象児童生徒に必要な支援を行うことは勿論のこと、同時に教師の支えになれる支援をすることも大切だと思いました。そう思うようになったのは、今年行った教育実習時に教師の視点を養う機会を得、教師の多忙さを肌で感じ、貴重な時間を過ごすことができたからです。

最後になりますが、担任の花田先生や日本語教室の石塚先生には、授業のことや対応の仕方等を相談させていただき助けていただきました。先生方と協力してできたことも学習支援を継続できた糧の1つです。

私ができることは微力かもしれませんが、少しでも力になればと思います。



### 学生ボランティアの支援があったからこそ

栃木市立栃木中央小学校教諭

花 田 と し か

本校には、1年生の2学期に中央アメリカから編入してきたA児がいます。現在は2年生になり、在籍学級で楽しく学校生活を送っています。これも学生ボランティアの支援があったからこそだと感謝しています。

A児は人懐っこく、クラスにもすぐ溶け込みましたが、学習面や集団生活の約束の理解の面で本人も担任としても戸惑うことが多かったです。そんなとき、学生ボランティアについて知り、昨年10月より条川さんに週1

回来いただき、学習や生活面での個別指導をお願いしました。条川さんは、常に「A児にとって、より効果的な支援は何か」という視点を持って活動に当たってくださいました。A児にとっては、自分の思いをすぐそばにいて受け止め、対応してくれる条川さんの存在が大きく、安心して学校生活に臨める支えとなりました。

担任として、安心できる環境づくりを一緒に行ってくださったことに心から感謝いたします。